ルオット日本人墓苑のA班

環礁

マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦歿者遺族会）
〒103-0013 東京都中央区
日本橋人形町1－8－2
電話 FAX 03－3661－8760
振替東京 00100-0-93487
編集兼発行人　佐藤宗丕

平成十一年度 慰霊祭 総会 直会の御案内

会長　佐藤宗丕

会員、会友の皆様にはお健やかに平成十一年の輝やかしい新春をお迎えのこととお慶び申しあげます。

恒例の慰霊祭、総会、直会を次の通り行いますのでお知り合いの方々をお誘い合わせ、賑々しく御参会下さいますようお待ち致しております。

日　時　平成十一年四月四日（日）午前九時

受付場所　靖國神社参集所前

慰霊祭　午前十時　御本殿

定期総会　本年は、慰霊祭終了後直ちに全員が九段会館「桜の間」に移動して、一時から総会を開きます。時間は三十分位と予定しています。

総会の議案は、出席申込みの方に、三月二十日までにお送りします。

総会終了後、その場で直会を開きます。カラオケなども用意します。

閉会は、三時頃と予定しております。

直会（なおらい）

◎出欠は同封のはがきで、出欠に拘わらず全欄に記入し、二月末迄に到着するよう御投函下さい。

（以下16頁へ）

目次

平成十一年度慰霊祭 総会 直会の御案内…会長 佐藤 宗丕…1
マーシャル、ギルバート諸島友好親善訪問旅行に参加して…2
佐藤 隆一 鈴木 裕子 小野 敏子 横山カホル
父の最後の地を訪ねて……並川 明子…5
ルオットから還った遺影（二）…6
軍における経歴や戦没時の状況を知りたい方へ……7
座談会の記……井上 武彦…8
在タラワ南瀛の碑などの慰霊施設保存に協力を決定……9
靖國神社 秋季例大祭
厳粛盛大に斎行……10
千鳥ヶ淵戦没者墓苑秋季慰霊祭
厳粛盛大に挙行……11
盡忠報国……黒川 正文…11
アメリカ・トレドを訪ねて……荒木 常子…12
名を彫りて―古き歌ノートの思い出―……平林 和夫…13
第三玉丸の半舷員……横山 文吉…14
丘の小春……横山 文吉…14
ルオット島の浜木綿……服部くにゑ…15
寄付者芳名・名簿訂正……15
環礁「ミレー抄」（21）……成宮芳三郎…16
本部だより……16

父に捧げる言葉

マーシャル諸島慰霊友好親善訪問旅行に参加して

横浜市　佐藤　隆一

この度日本遺族会の慰霊友好親善事業に参加するという貴重な体験ができました。マーシャル方面遺族会並びに会長夫妻のご配慮にお礼を申し上げます。

現地ではおおむね晴天に恵まれ、青い空の下で慰霊祭を行うことができました。各々が父への思いを述べたのですが、故人を思う生きた言葉に、目頭が熱くなるのを認めないわけにはいきませんでした。私もまた、碑を父と思い、積年の思いを述べさせて頂きました。それは初めて書いた父への手紙でした。

父上様

今ここマーシャル諸島クワゼリン島の日本人墓地を前にしてあなたを思います。

三十二才の若さで不帰の人となったことは余りにも悲しく、人生これからという時に父上もさぞ無念だったでしょう。生前当地より送られた手紙を読み返してみますと、家族に対してどんなに思いを残されたか、私も家族のある身ゆえに痛切に汲み取ることができます。私は既にあなたの年齢を遥かに超えてしまいました。父でありながら随分若いその遺影を見るにつけ、時の流れは何と早くて残酷なものかと思います。

父上を始め、数多くの方々が命を捧げた祖国は今、類まれな繁栄をとげました。それはあまりにめまぐるしく、時には心を見失い、他人の立場を思いやる余裕すら忘れてしまうことも少なくありません。ゆゆしき問題は日々提起されております。

それでも私達は毎日安心して眠りに就くことができます。当たり前のような日常が私に平和の意味を教えてくれるような気持ちがします。時には傲慢になることもありますが、それでも懸命に生きています。あなたはこの世にいない存在ですが、血は確かに受け継がれています。月並みな表現をするなら、あなたは今も私と共に生きているのです。

ご安心ください。苦難の道を辿りはしましたが、私達は現在五人幸せに暮らしております。あなたにとって孫である私の娘も来年結婚する運びになり、息子も学業に励んでおります。

どうか彼岸にあっても私達を見守っていてください。

それから、あなたがずっと欲しがっていたものを持参しました。トランプです。当時何度も送ったのについに手元には届かなかったようだからと母から託されました。随分時間がかかりましたね。許してください。

今夜、もし晴れたなら、星空を仰いであなたが感嘆したという南十字星を探そうと思います。故郷では見られないその星に、あなたはどのような感慨を持ったのでしょうか。見つけることができたなら、きっと分かる気がします。

ー帰国してー

南十字星は残念ながら見つけられなかったのですが、それでも父の存在をより身近に感じることができました。わずかな間でも父はこの地に存在し、確かに生きていたのです。そして御自身は明日をも知れぬ身にあって常に私達家族を案じてくれていたのです。

そのようなことも現地へ赴かなければ考えなかったことでした。日々の喧騒から遠く離れた南の島で父の存在を追うことができ、たいへん有り難く思っています。

もし機会があるのなら、また行きたい気持ちでおります。

写真に偲ぶ父の思い出

慰霊友好親善訪問

埼玉県　鈴木　裕子

父は、はじめての子の私が誕生まもなく昭和十六年応召、十九年クェゼリン島で玉砕しました。母も同年に病死し、父の思い出はありません。写真や手紙等でしか父の姿を知るすべはありませんが、戦地からの兄弟宛の手紙を読むにつけ、愛情といたわりが、伝わり、何度読み返しても目頭が熱くなります。四年前マーシャル方面遺族会が玉砕五十年の節目に現地慰霊を行うことになり、これが最後の機会と思い参加しました。クェゼリン島での始めての父との出会い、点在する珊瑚礁の美しさ、その感激は今でも忘れることが出来ません。父との思い出の一頁を作ることが出来ました。

今回幸運にもマーシャル・ギルバート諸島慰霊友好親善訪問団の一員として参加させていただき、思い出の一頁をさらに加えることが出来ました。平成十年十月十一日成田を出発し、十八日に帰国しました。グアムで寝坊した私は父に叱られそうで、恐る恐るマーシャル群島マジュロの土を踏みました。

十二日18：45マジュロ空港着。現地の方々よりレイの歓迎、当地で食堂を経営する山口雄平さん・かよ子さん親子が出迎えて下さり、奇しくも団員の横山さんと同郷であることがわかりました。宿舎に向うバス通りは、明るく燈され、大型スーパーもあり、大変な変わり様でした。宿舎は椰子で葺いたコッテージ、前に見える光る海、浮かぶ舟は忘れがたい光景です。

十三日午前A班二十名（クェゼリン・ルオット）は三枝日本代理大使表敬訪問。午後クェゼリン島15：00着、マリアンヌ・レーン報道官、成子（シゲコ）・ジャク

クェゼリン墓苑

ソンさんがにこやかに迎えて下さり、司令官代理ドナヒュー大佐の温かいご挨拶をいただきました。日本人墓地は緑の芝生できれいに整地され、周辺の椰子の木がゆれていました。見覚えのある赤い鳥居、日本列島のデザインの慰霊碑、胸が高鳴る日米の国旗を掲げ、祭壇に当会の佐藤会長よりお預かりした御神酒、各々ふるさとの好物等をお供し、ご焼香しました。十三名はご霊前に出て、父への追悼文を一人づつ読み上げました。五十余年の人生が走馬燈のように去来し、父との再会は抑えても抑えても涙が頬を伝わり声がかすれました。般若心経をあげ、「海ゆかば」、「ふるさと」を唄って三万余柱のご冥福をお祈り申しあげました。

かつて五十四年前、椰子の木が二本しか残らない程の激しい爆撃を受けたよすがはありません。ただ静かです。基地内の食堂でバイキング。米軍施設に宿泊する。

十四日は米軍機でルオットへ。機中から見る珊瑚礁の美しいセルリアン・ブルーに吸い込まれるようでした。戦没者墓苑で慰霊祭。戦跡をバスで巡り、往時の戦場を偲ぶ。ご同行・ご説明をいただいたクリスチャンセン管理官には数々のご親切をいただきました。

午後クェゼリンに戻る。マジュロ行が一便欠航、半日予定外の滞在となる。〝きっと父親達が引き止めたに違いない〟皆さんからは喜びの声が上がりました。タクシーに乗り二度目の墓参、昨日の緊張と違って周辺に何かしらの温もりを感じ、付近を散策し海辺で白砂にふれました。島内を巡り戻って見た空港前の夕焼けの美しさは忘れることはできません。父親達のプレゼントだったのかもしれません。二日間に亘ってご同行、お世話をいただいたマリアンヌさん、茂子さんに心からお礼を申し上げます。

十五日にマジュロ平和公園にある東太平洋戦没者墓苑を清掃し慰霊祭。追悼文を読み上げる五名の方の肩がゆれていました。午後マジュロ洋上慰霊、海はなぎ快晴、慰霊塔は、波のしぶきの間に間を往きつ、戻りつ、まるで生きていて別れを惜しんでいる様でした。・・・合掌

十六日合同慰霊祭。三枝代理大使ご夫妻、現地の方々ご出席。夜の懇親会でキリバスの少女達の南国の踊りを観賞。タイコ・歌の音と共に、レイをつけて流れる様に踊る彼女達の笑顔が美しい。平和であります様に祈る気持で一ぱいでした。タン・タタ、、、タイコの音が今でも聞こえてきます。

今回の慰霊訪問にお力添をいただいた皆様、墓苑を見守って下さっている現地の皆様、ご同行の皆様、ご心配をおかけした皆様、厚く厚く御礼を申し上げます。

COMOL－TATA

〈コンモール・タ－タ－、大そうありがとうございましたとのマーシャル言葉と教わりました〉

マーシャル諸島慰霊の旅

福島県　小野　敏子

秋晴れの十月十日、日本遺族会主催のマーシャル・ギルバート諸島慰霊友好親善訪問団員三三名が九段会館に集合した。結団式、靖国神社参拝、壮行会と緊張の一日であった。佐藤会長よりお供物をお預かりし九段会館泊。

十一日、成田を発ちパレスホテルグアム泊。十二日早朝グアムを発ちチューク、ポナペ、コスラエ、クェゼリンを経由し、ようやくマジュロ空港に着いた。歓迎のレイを受け感激しロバートレイマーズホテルに落ち着く。

十三日、B班と別行動、我々A班はマーシャル在日本大使館を訪問した。お供物と一泊分の着替え等を用意し念願のクェゼリンに向け飛び発つ。マリアンヌ・レイン報道官、ドナヒュー司令官代理、通訳の成子（ジャンジャン）・ジャクソンさんの出迎えに感激、早速バスで日本人墓地へ。

父の足跡を辿り文書や写真で予備知識を得て来たが墓地が造られた経緯、実際訪れ感慨深いものがあった。日、米、マーシャルの国旗がはためく中、本部の盛川様の司会のもと各自故郷の供物、香を手向け供花と厳粛に式が進められた。

暑さを吹き飛ばしてくれた強い風に追悼の言葉も流され父達の元へ届いたであろうか。最後に「海ゆかば」、「ふるさと」を合唱、五十余年の想いが込み上げ涙が止まらなかった。海が見える広々とした敷地の中各県産、県名入りのモザイク張りの碑に祖国を案じつつ戦没された方々が安らかに眠る碑にふさわしい造りに感動、そして左右二本の大木に見守られ永遠に平和と御冥福を祈る。

参加決定から鎮魂の祈りを込め千羽の鶴を折り、母の待つ祖国へ一緒に帰ろうと叫びつつも声にならない。九段会館で求めた現地慰霊用のお地蔵さんへ私達の写真を納め墓地に埋めていつの日か巡り合える日を祈り墓地を後にした。基地のレストランでバイキングに満足、クェゼリンロッジもホテル並。ここに宿泊したのは日本人で私達が初めてと伺い感激であった。

十四日、米軍機でルオットへ。元空軍のクリスチャンセンさんの案内と成子さんの通訳、報道官と共に説明を受けバスで一巡した。当時を偲び日本人墓地で慰霊祭を行い「海ゆかば」を合唱、戦没者の霊を慰めた。再び米軍機でクェゼリンへ戻ったがマジュロ行きの一機が故障し全員は乗れずクェゼリン班は後便になる。そこで時間もあり再び日本人墓地へ行こうと成子さん、添乗員の田村さんと私達十三名バスに乗る。父達が「急がずゆっくり見て帰れば」と引き止めたのではと思わずにいられない。基地で四度目のバイキングを頂きマジュロのホテル着は夜の十一時。少々疲れたがハプニングのお蔭で再度墓地を訪れることのできた有意義な一日であった。

十五日、マジュロの東太平洋戦没者の碑を清掃し、五名の慰霊祭を行い碑の経緯を知り無念であったろう戦没者の御冥福を祈った。午後マジュロ環礁内で洋上慰霊祭が行われ「海ゆかば」が流れる中、ローソクの灯る灯籠、折鶴、おいしい酒、水などを流し一緒に帰ろうと呼びかけ心に残る涙の洋上慰霊祭であった。

十六日、東太平洋戦没者の碑の前の椅子席にテントが張られ三枝臨時大使夫妻をお迎えし、盛川様の司会で厳粛に合同慰霊祭が執り行われた。ヤシの木陰に立つ碑から太平洋を望む環境のよい島民の憩いの公園になっている。「君が代」、「海ゆかば」を合唱、思い出をカメラに納めた。

夜は山口レストランに三枝臨時大使夫妻をお招きしてマーシャルの現況などのお話を伺い、当地では珍しい食べ物、のり巻きを頂きキリバス民族の踊りを楽しみ、マジュロ最後の夜を過ごす。

十七日、マジュロを発ち、雨にけむるクェゼリン着であったが離陸の際は雨も上り機上から望むクェゼリン島、エメラルドの海、表現出来ない程素晴らしい。父達が「よく見て帰れよ」と晴れたのではと思わずにいられない。そして島影が消えても涙が止まらなかった。さようならクェゼリン、帰りは逆コース、ポナペで乗務員の労働時間オーバーとのことで降ろされてしまった。小田急の田村様、高田様には休憩も食事をとる暇もない奔走、ほんとうにご苦労様でした。

十八日、ポナペを発ち乗り継ぎまでパレスホテルグアムで休憩。一八時四六分成田着後解団式、バスで東京駅経由九段会館着二〇時、予定より九時間余り遅れた。

クェゼリンの地を踏み、遙か遠い異国の地凍土の中、或いは亜熱帯の密林の中へ人知れず埋もれた犠牲者を偲ぶ時、艦は朽ち果てようと南十字星の輝く下、エメラルドの海に永遠に眠る父は救われると受けとめる事が出来た。そして感謝、感激、感動の連続であった。しかし命をかけたあの戦争は何だったのだろうか今も問わずにいられない。

盛川様、田村様、高田様他皆様には助けられ励まされて帰る事が出来ました。心より厚く御礼申し上げます。

（故　蓬田　正俊　長女）

ウォッゼを訪ねて

埼玉県　横山カホル

今回、夢にも思ってみなかった父の眠るウォッゼ島に行く事が現実となり胸が踊る思いがしました。

私達三十三名、A班とB班に分かれてそれぞれの所に慰霊巡拝に、行く事が決まりました。

平成十年十月十一日から、十八日まで。成田からグアムへは三時間余り。十二日は白い雲と、底まで透き通るような青い海を下に見ながら、約八時間の旅です。チューク、ポンペイ、コスラエ、クェゼリン等の島々を、経由してマジュロ空港へ。空港には、十七年前に日本から永住された山口さんが、出迎えてくれました。現地の方々より、レイのプレゼントを頂き心が安らぎました。

マジュロのホテルへと向かい、実感がこみあげてきました。

翌十三日は、チャーター機で早朝四時三〇分、まだ夜が明けきらない空へと、飛び立ちました。太陽が顔を出した時の夜明けの美しさは、表現する事ができません。午後は、ベシオ島の南瀛の碑などの慰霊巡拝へ。

翌十四日は、タラワの学校を訪問し、授業風景を見ることができました。生徒達の唄と民族舞踊で歓迎をうけ、特別に日本語で童謡を聞かせてもらい、思わず涙が流れてしまう程、感激してしまいました。お返しに、私達からは

ウォッゼ島で

学用品等をプレゼントしました。その次には、日本援助隊の方達の土木作業現場と寄宿舎等を、見学させてもらう事ができました。

十五日は、マロエラップ環礁のタロア島を慰霊した後、父の眠るウォッゼへ向かいました。

空からのウォッゼ島は、エメラルドグリーンの海に囲まれた、こんもりヤシの木が繁る静かな島です。こんな小さな島で五十数年前に、地獄の戦争をしていたとは、とても思えません。飛行機から降りて一歩足を踏み入れた興奮は、今でも忘れられません。

ヤシの木の下のセメント造りの、防空壕の前に祭壇をつくり各自追悼の言葉を述べました。皆、涙々で声にならないような声をふり絞り、父に語りかけました。

私達、遺児としてのこれからの大きな課題として、ウォッゼ島にもぜひ慰霊碑がほしいと、語り合いました。

十六日は、A、B班全員でマジュロの東太平洋戦没者の碑の前で合同追悼式を行い深い感銘をうけました。

戦後の豊かな暮しの中で、チャーターをしなければ飛んで行けない島があるなんて、信じられない事です。ウォッゼ島は、そんな小さな島々の一部です。サンゴ礁とヤシの木に囲まれた美しい島です。健康であったならば今一度、と思いつつ意義ある旅に参加できた事を感謝致しています。

最後に、厚生省の職員の方、添乗員の方、本当にありがとうございました。

紺碧のサンゴの島に父眠る
ヤシの木陰の何処に知れず

父の最期の地を訪ねて

神戸市　並川　明子

平成十年　父の戦死後五十五年目に初めて二人の弟土井久司・土井厚二と共に米軍の許可を得て戦死の地マーシャル諸島のクェゼリン・ルオットの二島を訪問し、日本人墓地にお参りすることが出来ました。

二年前　日本遺族会の慰霊友好親善訪問団の一員に加えて頂いて、下の弟が私達兄弟　姉妹を代表して　父が最後に乗船した輸送船が、米軍の爆撃で沈没したと言われている当地を訪れ飛行場のショーケースの中に　父の乗っていた船の銘板をみつけ　現地の方のご厚意で海底に沈んでいた船の『永興丸』とはっきり読み取れる銘板を譲り受けて帰りました。父の戦死は　私が女学校一年、すぐ下の弟は小学校四年、妹二年、下の弟は幼稚園、一番下の妹は母のおなかの中、年老いた両親と五人の子供を抱えて当時三十四歳の母は家族を飢えさせないように、必死に働いて一人ひとりの子供に精一杯の愛を注いで育ててくれました。

初めて墓参をした弟が、佐藤会長様始め、これまでお世話を続けて来られた方や、現地の方々とも親しくお付き合いさせて頂くようになり、次回は母と五人の子供が揃って現地に墓参に行こうと昨年夏から話し合って来ました。

しかし、数えどし九十歳の母が狭心症をおこし、医師に飛行機を禁止されてしまいました。二人の妹も母の健康を気遣って全員での墓参は無理となり、今回は私達三人で出発しました。

東京の佐竹様とグアム空港で合流し、翌日早くミクロネシア航空にて南海の島を順々に着陸しながら夕刻やっとクェゼリンに到着しました。空港には米軍司令部の女性秘書官とラポイント英子（ヒデコ）さんが出迎えてくださり、空港のすぐ横に建つ宿舎に案内され、荷物をおいてその近辺を散歩したり、軍関係者用の日用品ショップをのぞいたりしたあと英子さんのお家に招待して頂き心づくしの日本食を御馳走になり、その温かいおもてなしに心から感謝して宿舎に帰りました。翌朝はジャクソン成子さんの案内で、軍人用の食堂へ歩いて行き、朝食後昨日見た店でクェゼリンと名前のはいったタオル等、土産用に少し買ったりして時間をつぶしました。軍用機の出発の時間となり、日本から持参したお供え物を持って、いよいよ目的の島ルオットに向かいました。この島は、世界の四大レーダー基地の一つとか、この島に住む日本人女性　クーロング節子さんがアメリカ人のご主人の運転する車で空港までお迎え頂き、日本人の墓地まで連れていって下さいました。

昨日体調の悪かった奥さんに代わってご主人が墓地の草を刈りペンキを塗って下さったとか。美しく整備されたお墓に感謝しつつその墓前に、佐竹さんは靖国神社の提灯を捧げ、私達は母と子供が名前を書いた木彫の仏像と造花や、種々の供物を供え皆で般若心経をとなえ、弟が父へ語りかけるように今の家族の様子を手紙にして読み、五十五年間の思いを父の魂に届けと心を込めて法要しました。

その後父の乗っていた船が沈んだ湾の海岸に案内され、沖の方をさして『あの辺に永興丸が沈んでいる』、外にも十隻以上の輸送船が沈んでいる。と教えて頂き、父の好きなお酒を注ぎ、

亡き父へ般若心経を

母からの手紙と弟の手紙をこの海に流し『どうぞ安らかに成仏され何時迄も見守って下さい』と祈りました。真っ白い砂浜で小さい石を母と妹へ父の代わりにと少し拾って持ち帰りました。

その後元日本軍司令部跡に案内され小さな崩れそうなコンクリートの建物と、その前に残っている幹部用防空壕を見て、海抜一メートル余りの平坦なサンゴ礁の隠れるところもない小さい島を守るために多くの人の命を失うなど、どうしてもっと早く戦線を縮小しなかったのか、軍の上層部の責任は重いと思いました。

そしてクーロング節子さんのお家に招待して頂き飛行機の出発時間まで心づくしのばら寿司と煮豆など御馳走になり、再び車で空港まで送って下さり、ご主人と共に私達の飛行機が飛び立つまで長い時間見送って下さったお二人の温かい行為に感激しながら窓から手を振りました。

軍用機でクェゼリンに帰り、翌日クェゼリンの日本人墓地にもラポイント英子さんの案内でお参りしました。墓碑は日本の各県の石をはりつけ日本国を形作ってありました。その日の午後グアムに帰り一泊、翌朝佐竹様は東京、私達は関西空港にむけてお別れして帰国しました。

玉砕した南方の孤島に私自身七十歳も間近になって父の墓参に行くことができるなど夢にも思っていませんでしたが、思いもかけずこのような機会を与えられたことに感謝し、二度と悲しい戦争が起きませんよう平和な世界がつづくように、若い人々に語り継いで行かねばならないと心に誓っています。

最後に、この度の墓参にお世話になりました大勢の方々に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

ルオットから還った遺影（二）

「環礁」69号4頁以下に紹介した首題についてお知らせします。

① 写真⑧の「勝野　實様」は昭和三二年に病歿され、長男「勝野源太郎様」は神奈川県逗子市に健在です。

② 写真①の向って中段右端の「安間（あんま）定男様は、十八年一月、海兵団入団、テニアンで戦死されました。妹さんの山田美奈子様は静岡県浜松市に健在です。（以上69号に披露ずみ）

③ 十年七月三十日、横浜の片山　計会員から次の要旨の便りがありました。「69号を見て驚いた。6頁⑬の前列向って左はクェゼリンで玉砕した兄と通信学校同期で白河市在住の長谷川欣一郎様です、電話をしたところ写真の四名　大野清太郎、青木玄一、三国秀雄の名前に驚いていました。大野清太郎様はルオットで戦死されました。長谷川様には69号をコピーして送りました。」

④ 八月四日長谷川欣一郎様からの便り要旨。「片山様から環礁のコピーを頂き感激しました。写真⑬の大野清太郎君は幼な友達で、家も隣で同時に出征しました。片山さんからのコピーを清太郎君の弟、博さんに届けました。

写真⑬の前列向って右は大野清太郎君その隣は私です。私は電信員で駆逐艦「曙」乗艦中マニラ湾の戦闘で「曙」は撃沈され私は戦後生還しました。後列の二人は陸軍にゆきました。私は昭和十八年一月に入団し、三月に通信学校に練習生として入校しました。

ルオットから写真を持ち帰って下さった山森久江さんのお兄さん「山村敏雄様（十九年二月ルオットで玉砕）は私共と通校同期でした。深い機縁を感じます。」

⑤ 十年八月四日、白河市大野　博様よりの来信（要旨）

「「環礁」をお送り頂き、又、電話も頂き、感激で胸が一ぱいです。「環礁」の写真①③⑬に兄清太郎が写っております。兄が出征前に留守宅に届けた写真の中に⑧⑨⑩⑬と全く同じものがありました。

戦場で拾った写真を五十年余りも遺族に届けようと持っていてくれた海兵隊員のズーリックさんやお力を貸して下さったクェゼリンのラポイントさんに感謝の気持ちで一ぱいです。」

⑥ 十月十日、大野　博様より来信。「会長様に教えて頂いて申請していた軍歴などの証明が厚生省から届けられました。」

履　歴　書（抜粋）

海軍上等整備兵　大野清太郎

大正一一年一月二日生

横徴整第一四八三六号

昭和一八、一、一〇横須賀第二海兵団入団　同日海軍二等整備兵ヲ命ス　同年四、一五海軍一等整備兵ヲ命ス　同日第七五五海軍航空隊附ヲ命ス　昭和一九、二、六海軍上等整備兵ヲ命ス

昭和一九、二、六、戦死

戦没状況

第七五五海軍航空隊ルオット派遣隊として南洋群島マーシャル諸島ルオット島において勤務のところ、昭和十九年二月一日以降、同島に上陸の敵部隊

大野清太郎命

昭和十八年三月於辻堂

69号5頁③より

と交戦、昭和十九年二月六日、所属部隊玉砕の際戦死と認定。

⑦　九月七日、熊本県の村上佳寿子会員から来信の大要

「入院中の主人が六月二十八日に亡くなり私も看病疲れで入院し、帰宅して69号を見て驚きました。5頁の写真②前列左から二番目の下士官は戦死した私の兄村上源一郎です。私たちには子供もなく、兄の物は何もありません。写真のコピーを送って下さい。」

⑧　十一月十九日、村上佳寿子さんの便り。

「会長様に教えて頂いたとおり厚生省に申請していた軍歴などの証明を頂きましたので一部お送りします。」

履歴書（抜粋）

海軍整備兵曹長　村上源一郎

大正八年二月一六日生

佐志整第一四八二号

昭和一二、六、一佐世保海兵団ニ入団

同日海軍四等機関兵ヲ命ス　一三、九、一八第四七期普通科整備術練習生ヲ命ス　一四、三、二四卒業同日海軍二等整備兵ヲ命ス　一六、五、一任海軍三等整備兵曹　一七、一、一二第四八期高等科整備術練習生ヲ命ス　昭和一七、一〇、三一任海軍二等整備兵曹　一七、一二、二卒業　同日第七五五海軍航空隊附ヲ命ス　一八、九、一一叙勲七等授瑞宝章　一八、一一、一任海軍上等整備兵曹　一九、二、六任海軍整備兵曹長　昭和一九、二、六戦死

戦没状況

第七五五海軍航空隊附として南洋群島マーシャル諸島ルオット島において勤務のところ、昭和十九年二月一日以降、同島に上陸の敵部隊と交戦、昭和十九年二月六日、所属部隊玉砕の際戦死と認定。

村上源一郎命

69号5頁②前列左より二人目

⑨　厚生省に依頼してあったルオットから還ってきた写真について、去る十月二十二日に同省社会・援護局業務第一課調査資料室から大要次の通知がありました。「当局保管資料を調査したところ、該当者が抽出され、現在各都道府県庁に対して現住所等の調査を依頼中であり、回答にはもう暫く時間がかかりますことを御了承願います。」

右の事情から70号には間にあいませんが、四月の総会か、八月の71号にはある程度まとまった報告が可能と思われます。

軍における経歴や戦没時の状況を知りたい方へ

皆様の中には戦没された方の、軍における経歴や戦没時の状況などをお知りになりたいと思う方がおられることと思い過日、厚生省を訪れ照会の方法等について尋ねてきましたのでお知らせいたします。

すでにご承知のことと思いますが、近年、情報化社会の進展等社会情勢が変化してきており、また一方においては、個人のプライバシー保護の意識が高まり、様々な問題が指摘されるようになりました。

厚生省におかれても、人事記録の取り扱いの内規を定め慎重に取り扱っておられます。

人事記録は個人情報のため一般には公開していませんが、本人及び遺族からの照会に対しては回答しているとのことでした。

つきましては、戦没者の戦没当時の状況や軍歴についてお知りになりたい方は、次の要領によりご照会されるようおすすめいたします。

その際注意していただきたいことは、陸軍については終戦時の本籍県の援護事務主管課、海軍については厚生省社会・援護局業務第二課で兵籍を保管されていると聞いておりますから間違いのないようにしてください。

なお、戦没者と請求者の身分関係を明らかにする資料（例えば戸籍謄本）が必要とのことですから、それを添付し、左記事項を記載して照会されればよいと思います。

（例）

標題　戦没者の戦没時の状況と軍歴について（照会）

1使用目的（法要に必要のため、子孫に残すため、等）

2氏　名（改姓された場合は旧氏名も記載）

3生年月日

4終戦当時の本籍地

5軍　歴（承知の範囲で記載）

6請求者

氏　名

現住所

戦没者との身分関係（続柄）

おって、多数の依頼文書が寄せられていること等から、回答までには多少日時を要しているので、お含みいただきたいとのことでしたので申し添えます。

※海軍関係（厚生省）の照会先

〒一〇〇－八〇四五　東京都千代田区霞が関一－五－二

厚生省社会・援護局　業務第二課長

※本件についてのお問い合せは、本部又は佐藤宗丕（☎〇三－三七二〇－一二四八）がお受けしております。

座談会の記

井上　武彦

平成十年十月二日（金）東京中央区の「労働スクエア東京」で「環礁」70号発行を期に編集ボランティア活動をして下さった方々をお招きして意見交換を行った。休日でないためか出席者は少なかったが、会の将来のあり方などにもふれた熱心な討議が行われた。

会場には都合により欠席された方々の所感や会に対する要望などのコピーが配られ、会員の会に対する熱意が感ぜられた。

☆出席者（順不同、敬称略）

鵜沼久義、天野好子、鈴木裕子、田中雄吉、津久井艶子、堀口太平、秋元輝夫、晝間志津子、佐藤宗丕、荒木常子、井上武彦、高林芳夫、山口正雄、佐藤ナヲ

☆欠席し所見を寄せられた方

冨田ミツ、北原ひで子、鈴木藤太、井上賀雄、大高吉郎、鈴木つな子、佃毟美、滝　知道、中村順子、山口裕子、山森久江、石沢洋子、岩田とし子、内山浅子、岡野正文、片山　計、金子武晴、萩原　誠、橋田正幸、西森サツキ、高林セキ、土井厚二、内海淑子、石谷典夫、山口良二

☆参加者の声

遠路福島から参加された鵜沼さんから、一昨年お父さんの戦死された場所、状況がやっと判明し、日本遺族会主催の慰霊団に参加した事、この会からの情報が大いに役立った事を述べられた。そして福島県遺族会に立派な報告書を提出された事を話された。

埼玉からは、本会当初からの会員である藤田様のお嬢さんである天野さんが参加され、戦死したお父さんの事を、お母さんを通じて教えてもらった事を話された。

埼玉の鈴木さんから、平成六年の五十年祭現地慰霊に参加させて頂いた時の感激を話された。

千葉の田中さんは、ギルバートに十八回も訪問し、現地の人達とのコミュニケーションを図っていることを話された。

千葉の津久井さんからは、三歳であったお嬢さんは五八歳になり軍属であったご主人から、戦争中の連絡の状況を話して下さり、現地に慰霊碑を建立した時の思い出を話された。

会友の秋元さんは、ヤルートの事、ブラウン島の事、ウォッゼの事、そして若き中隊長として生き残り帰国する時に、数々の現地資料を苦労して持ち帰られた事を話された。鵜沼さんは昼休みに熱心に当時の話を聞いていました。平成五年に南十字星戦友会は解散したが、現在でも想い出集を発行して仲間内に送っている由。

会友の堀口さんからは、盤谷丸の最後について話され、長い間情報が無かった広島県会員佐々木さんのお父さんの事など、当時の事を語られた。

会長から「マーシャル遺族会の存続について」「今後について」の資料が出席者全員に配られ、内容について会長の見解が述べられた。

私井上は兄賀雄を通じて本会の事は、当初から知っていたつもりだが、年表をみて改めて過去69号の環礁を通じてあらゆる事をやってきた感がある。しかし、私のように最近入会した会員は、戦死した父親の事を出来るだけ知りたいから、出来るものならぜひ続けて欲しい。

荒木さんからは、戦死された父上の日誌を拾得したアメリカ人にお礼を述べるため米国に行き、素晴らしい歓迎をうけられた事を話された。

高林さんは、「今後の会について」の背景を、説明した。会長と熱心な意見の交換がなされた。

☆欠席者の殆ど全員から所見が寄せられましたが、代表的なものを次に御紹介します。

東京都　佃　毟美

本年は不順な天候続きの夏でございましたが皆様お障りなく会務にご精励の事をお慶び申し上げます。

さて会誌「環礁」が次号にて70号を数えることになりました由、役員皆様方の其の間のご苦労に対し厚くお礼申し上げます。第69号は大変内容が豊富で頂くと直に夢中で拝読して了いました。特にご遺骨やご遺品の帰還は終戦後半世紀を過ぎて尚、此の様に在ると云う事に深い感銘を覚えました。そして其う云う機会をつくる事が私達遺族の務めではないかと思いました。私自身はもはや老齢にて現地慰霊は望むべくも有りませんし今回の座談会も欠席いたしますがお集りの皆様方にこれからも慰霊の旅を数多く計画して頂き、帰還を望んでおられる英霊にそのチャンスをお与え出来ます様お願いしたいと思っております。現地の方々との交流を深め「環礁」は私達の交歓誌、情報誌として永く続けてくださいます様お願いいたします。何十年も前に現地慰霊をして来た私には現在の土地の様子や人々の生活がどの様に変っているか興味深いものがあります。其の様な写真等も「環礁」の中で拝見できたら嬉しいと思います。記事を減らして（印刷費軽減）時には写真のカラー化等もいかがでしょうか。では皆様のご健勝とご盛会をお祈り申し上げます。

東京都　滝　知道

一、会報『環礁』は、遺族のよりどころであり、遺族の連携・情報伝達等に果たす役割は絶大です。春の靖国神社慰霊祭に参加出来ない遺族は、この『環礁』を唯一のよりどころにしていると思います。

二、会員名簿の作成・記念誌「南十字

星」の作成・会報合併本の発行等、遺族にとって感謝すべきことばかりです。永久保存版で、時折取り出しては読ませて頂くとともに、遺族間の連絡に使用させて頂いております。

三、会を始めてから三五年もの間奉仕を続けて下さった役員の皆様に御礼申し上げますとともに将来状況の変化などがありましても、可能な限り長く会が維持されることを念願しております。若し、会が無くなったら遺族はよりどころを失うことになりますので。

千葉県　豊谷美恵子

戦没二人の兄達の五十年忌法事が済んで八十八才の母は、間もなく黄泉の旅路についてしまった。母が大事にしていた手箱の中に「環礁」綴りを見付け、私をして亡き兄達の思い出を甦らせマーシャル方面遺族会加入の契機となりました。

長兄がクエゼリンで玉砕、続いて次兄がニューギニアで戦死という知らせをうけた母の気持ちを憶いますと胸がつまります。戦後発行された「環礁」は母にとって傷心を癒す唯一の支えとなっていたように思えてなりません。

私も兄らの〝無念さ〟、生前の母の悲哀が判る年齢となり「環礁」が、その思いを深めさせてくれました。そのご縁でクエゼリン現地慰霊にも何回か訪れることができ、新たな感動は忘れることができません。ご縁になった「環礁誌」が次の世代に永く引きつがれることをお祈りいたします。

神奈川県　萩原　誠

数年前遺族会のご尽力を得て巡拝旅行に参加して国と家族を守るため心を一つに団結して玉砕された戦没者に対して自分として、今なにができるのだろうか。同じ思いをもつ遺族がその遺志を受け継いで協力し合い仲良くすることが御霊をお慰めすることだ、と「海ゆかば」を歌いながら思った次第です。

環礁はその名の通り美しい輪になった珊瑚礁です。遺族が「環礁」を通じて心と心のループをつくり一層の交流を深めることが御霊に対する何よりの功徳かとも思っております。

新潟県　高林　セキ

環礁70号を迎え、おめでとうございます。年を重ね、遠出が億劫になります。環礁の届くのが何よりの楽しみでございます。会員皆さんの心と心をしっかりときずなで結び、生きがいとして歩んでこられたことを〝感謝〟申し上げます。

（69号）白井正子様のご子息様の〝きずな〟を拝読して、ジーンと胸に迫り、涙が流れてきました。

福島県　冨田　ミツ

私共は「環礁」を通じて遺族どうしの絆が深く結ばれ、肉親同様のおつき合いができました。終戦直後のラジオの尋ね人の時間に耳をすませて聞いたことが思い出されます。私共の「環礁」はそんな役目を果しているように思います。

役員の皆様には御苦労さまですが何時までも「環礁」の火をともし続けていって下さい。

東京都　山森　久江

マーシャル方面遺族会に入会しまして早や十二年が過ぎ去りました。会報「環礁」は遺族みんなの心のかけ橋となって、どんなにかはげまされたことでしょう。環礁の灯を消さないで、いつまでもつづけていって下さい。

右のほか、数多くの方々から異口同音に次のようなことが述べられました。

○近頃「環礁」に目立つことは、若い層の皆さんの清純な意見が多くなってきたことです。本会の前途に明るさを覚えます。

○原稿集め、取材、編集などに若い層の方々のアイデアを積極的にとり入れていただきたい。等々。

在タラワ南瀛の碑などの慰霊施設の保存に協力を決定

本会は、昭和四十三年に米国陸軍の許可を得て、マーシャル、ギルバート諸島全域のわが軍の戦歿者三万余柱の忠魂慰霊碑を、全会員の熱意と協力により、クェゼリン本島に建立しました。

因に、ロイ・ナムル（ルオット）には米軍により日本人墓苑が造られ更にその中に、日本軍人軍属の丁重な慰霊碑が建立され、現在も米軍によってクェゼリンの墓苑と同様に丁重に管理されております。（南十字星15・17頁）

昭和五十七年にギルバート関係会員は、同方面で玉砕された軍人軍属五千三百余柱の慰霊碑をタラワ環礁ベシオ島に建立することを企画し、本会は之に協力することを約しました。その後の経過は、「環礁」36号以降に報告のとおり関係者と有志会員・会友の努力により「南瀛の碑」「マリア観音像」などの慰霊施設が完成しております。

最近に至り、現地の事情により、この慰霊施設の移転という重大な問題が起こり、関係者は会員の老齢化のこともあり、特に財政の面では大層苦慮しておられます。

本会は、前記クェゼリンの碑建立以来の経緯もあり、この際右慰霊施設の維持保存に協力するため役員会で協議の上五十万円を贈ることとしました。

秋季例大祭
盛大に齋行

参道の樹々が美しく色づき始め、大輪の菊花も色とりどりに咲き薫る神苑。

靖國神社秋季例大祭が、去る十月十七日から十九日の三日間に亘り、厳粛かつ盛大に齋行された。

また、十八日の当日祭には勅使の参向があり、天皇陛下からの御幣物が捧げられた。

霊璽奉安祭執行

例大祭奉仕にあたり、湯澤宮司以下奉仕の神職は十六日夕刻から齋戒・参籠に入った。翌十七日午後三時には、拝殿に於て「清祓ノ儀」が執り行われ、奉仕員・神域・祭儀の諸具が祓い清められた後、本殿に進み、三日間に亘る例大祭がつつがなく奉仕できるよう神前に祈願する「本殿ノ儀」が執行された。

同日夜午後七時には、浄闇の中「第百二十三回霊璽奉安祭」が厳かに齋行され、新たに八柱の神霊が御本殿正床に奉遷、お祀りされた。

勅使堤公長掌典参向

翌十八日の「当日祭」には、午前十時に湯澤宮司以下祭員が御本殿に参進。國學院大學吹奏楽部の奏する「国の鎮」と共に、御内陣の御扉が開かれ、和妙・荒妙をはじめ海川山野の神饌五十台が供えられた。

次いで、宮司が昨夜新たに神霊をお迎えしたことを奉告すると共に、英霊の安らかなお鎮まりと世界の平和を祈念する祝詞を奏上した。

十時三十分、参列者一同謹んでお迎え申し上げる中、勅使堤公長掌典が御本殿に参進。御幣物を奉献し大御心のままに御祭文を奉上せられ、玉串を捧げて拝礼の後退下された。続いて、國學院大學フォイエルコール混声合唱団による「鎮魂頌」の献楽の後、特別参列者が玉串を奉りて拝礼された。その後、宮司が参列者に対し挨拶を申し上げ、祭典は滞りなく終了した。

翌十九日の「第二日祭」は、総代をはじめ、全国から参集した御遺族・戦友・崇敬者が多数参列の中執行された。また、午後六時には、祭典の無事終了を奉告する「直会の儀」を執行し、三日間に亘る盛儀は滞りなく終了した。

各界代表並びに御遺族・崇敬者参拝

当日祭には、中井澄子日本遺族会会長、堀江正夫英霊にこたえる会会長、黒岩龍彦神社本庁統理代理、原多喜三奉賛会会長代理、井内慶次郎・小田村四郎・山本卓眞・勝谷保各崇敬者総代をはじめ、各界代表や全国から参集された御遺族・崇敬者五百五名が参列。また、ポーランド共和国スタルシコ陸軍大佐、トルコ共和国セミシ・イェシルプルサ海軍大佐も参列された。

第二日祭には、大山正崇敬者総代をはじめ、御遺族・戦友・崇敬者四百八十八名が参列した。

各種奉納芸能賑やかに

大祭期間中、境内能楽堂では、「奉納芸能大会」が賑やかに繰り広げられ、日本舞踊、詩吟、民舞、演劇、古武道、大正琴、奇術などが次々に披露された。一方、参道でも江戸芸かっぽれが行われ、参拝者から盛んに拍手が送られていた。また、華席では、献華協会各流派代表による特別献華が、中門鳥居北側幄舎と能楽堂前広場では、靖國神社菊華奉献会主催の第四十三回「奉納菊花展」が開催された。（神社社報「靖國」第五二一号より転載）。（以下割愛）

靖濤

光陰矢の如く、今年最後の号をお届けする時期となった。▼一年を振り返ると、一向に不況回復の兆しが見えない社会状況と呼応するかの様に、政・官・財界をはじめ、教育現場や地域社会、更には家庭や個人に至るまで様々な問題や事件が惹起した。一方、明るい出来事では、東條英機元首相を主人公に東京裁判の全容を再現した話題の映画『プライド・運命の瞬間』が、観客動員百三十万人を突破する大ヒットとなったことや、小林よしのり氏が大東亜戦争の真実像と、国家と個人の関係について描写した漫画『戦争論』が、世代を超えて大きな共感を呼んだ。今後こうしたことをきっかけに、東京裁判史観の呪縛と、戦後民主主義の洗脳を打破る国民運動が、大きく前進することを期待したい。▼靖國神社では、明治維新百三十年に当る本年、当時先人達が示された気概と叡智を鑑として、湯澤宮司の大号令のもと中長期計画を策定し、現在、明年に控えた御創立百三十年記念事業の諸準備が進められている。今月十七日には、全国靖國講と奉賛會を母体に、神社の護持と英霊顕彰の国民運動を展開する新組織「靖國神社崇敬奉賛会」が設立される。また、幕末から明治維新を経て、現在に至るまでの神社の歴史を辿る写真集『靖國の祈り―目でみる明治・大正・昭和・平成―』の編纂作業も、明年四月の刊行を目指して鋭意進められている。更に、御創立百三十年の奉祝気運を盛り上げるため、鳥居に白鳩の飛翔をデザインしたシンボルマークも考案され、標語も「やすくにの祈り　ともに未来へ」と決定した。▼「やすくにの祈り」とは勿論英霊等の至情であり、その至情を悠久に伝え継いで行くことが、これからも靖國神社の大きな使命である。

千鳥ヶ淵戦没者墓苑 秋季慰霊祭

当奉仕会が主催する平成十年度秋季慰霊祭は、十月十九日（月）、澄み渡る青空の好天に恵まれ、常陸宮同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、内閣総理大臣代理、厚生大臣、環境庁長官代理、防衛庁長官代理、統合幕僚会議議長、陸・海・空各幕僚長、各都道府県知事代理、日本遺族会会長、各協賛団体代表、宗教団体代表、陸・海・空各自衛隊、駐日大使館付武官、各地遺族会代表等の参列を得て、極めて厳粛盛大な慰霊祭が行われた。

懸念された空模様は、前日午後から急速に回復に向かい、慰霊祭当日十九日は実に素晴らしい快晴に恵まれた。

この日、墓前には常陸宮御下賜の大花籠が飾られ、その両側には内閣総理大臣、衆・参両院議長、最高裁長官他各方面からお供え頂いた生花が墓前に所狭しと供えられていた。

定刻午後一時に、常陸宮同妃両殿下は、陸上自衛隊東部方面音楽隊の奏楽に迎えられ式場に御臨場になられた。

式典は参列者全員による君が代斉唱の後、海老原宗陽先生により心をこめた献茶が行われ、続いて瀬島奉仕会会長が別項のような、戦没者の心情を偲ぶ切々とした式辞を述べられた。

この後、石橋一歌殿・佐伯龍静殿により昭和天皇御製が朗々と奉誦され、堀越高校生徒五十名による鎮魂頌斉唱が行われた。続いて内閣総理大臣の追悼の辞を古川内閣官房長官が代読されたが、世界の恒久平和へ向けての努力を誓うことを強く訴えていた。

やがて参列者一同が起立するなか、両殿下は墓前にお進みになり、御拝礼、黙祷を捧げられた。式場を埋めた参列者も殿下と御一緒に黙祷を捧げて、式場は一瞬厳粛な静寂に包まれた。御拝礼を終えられた両殿下は、遺族席に明るい御会釈を賜りながら御退場された。

続いて自衛隊代表部隊参拝、音楽隊慰霊演奏が行われ、その滞々堂々とした姿に参列者一同自衛隊への親しみと信頼感を一層深くした。

この式典に、厚生省からは大臣自身の他、政務次官も特に参列され、厚生省関係者の戦没者慰霊への深い配慮が参列者に大きな感銘を与えた。

追悼の辞

本日、常陸宮同妃両殿下の御臨席の下、千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会秋季慰霊祭が挙行されるに当たり、慎んで追悼の言葉を申し上げます。

先の大戦が終わりを告げてから、今日まで五十三年の歳月が過ぎ去りました。苛烈を極めたあの戦いの中で、祖国の安泰を願い、家族を案じつつ亡くなられた戦没者の方々に対して、ここに心から御冥福をお祈りいたします。

また、あの戦いの中で、多くの苦しみと悲しみを与えることとなった諸国民、とりわけアジアの方々に対しても、深い反省とともに、謹んで哀悼の意を表したいと思います。

戦後我が国は、焦土の中から立ち上がり、平和を国是とし、幾多の困難を乗り越え、国民のたゆまぬ努力により、目覚ましい発展を遂げてまいりました。

その中で、家庭の柱である父や子、兄弟を失われた御遺族の方々の並々ならぬ御苦労のあったことを決して忘れることはできません。

そして、この平和で豊かな今日においてこそ、戦争の悲惨さと、そこに幾多の犠牲があったことを思い、次の世代に語り継ぐとともに、国際社会において、再び戦争の惨禍を繰り返すことのないよう、恒久の平和を確立することが、今日、我々に課せられた重大な責務であります。私は、このことこそが、過去に対する償いとなり、犠牲となられた方々の御霊を鎮めることになるものと確信いたしております。

本日のこの式典に当たり先の大戦から学びとった多くの教訓を改めて深く心に刻み、国際社会において重要な地位を占める一員として、世界の恒久平和の確立と、心豊かに平和に暮らせるより良い社会の実現のため全力を尽くすことを、ここに誓うものであります。

終わりに、戦没者御遺族の皆様の深い苦しみと悲しみに改めて思いを致すとともに、皆様方の御平安を切に祈念いたしまして、追悼の言葉とさせていただきます。

平成十年十月十九日

内閣総理大臣　小渕　恵三

昭和天皇御製

千鳥ヶ淵戦没者墓苑
くにのためいのちささげし
人々の
ことを思へば
むねせまりくる

（奉仕会会報より転載）

盡忠報国　それはクェゼリン島で戦死した兄の黒川澄三の大好きな言葉でした。

山梨県　黒川　正文

アメリカ・トレドを訪ねて

荒木　常子

環礁67号にブラウンから還って来た父の日誌の事をお話しました。その折玉砕の島から日誌を拾って五十年もの間、遺族に還そうと努力をして下さった元アメリカ兵ジレスピーさんに一度お目にかかってお礼を言いたいが、オハイオは余りに遠いとなかば諦めておりましたが、次第にその気持は強くなり何度かの手紙のやりとりの後、遂にオハイオ州のトレドという街に飛ぶ事に決めました。一人きりの心細い旅に若い友人が同行を申出てくれ、九年十月五日成田を発ちました。時差十五時間、デトロイトで国際線に乗り継ぎ、小さなトレドの空港に十七時過ぎ着。カメラのフラッシュが点滅する中それとわかる背の高い白い髭の品の良い紳士御夫婦と御家族、それに意外だったのは数名の日本人女性達がにこやかに出迎えてくれていたことでした。ジレスピーさんと厚い握手を交し、言葉は通じないながら何度も何度もその御厚意を謝し、嬉し涙が頬を伝いました。車で近くの公園にある教会へ向い三本のローソクを立てて「一本は貴方のお父様のため、一本は亡くなったお母様のため、そして一本は貴方のためのものです。神に祈りましょう。」と全員で祈って下さいました。夜は川辺のレストランに御兄弟夫妻、子供さん方夫妻と全員で揃い夕食に御招待されました。トレド大学の教授である日本人の原先生が通訳を引き受けて下さり一族の温かい歓迎に包まれました。その夜は御好意でとって下さった川ぞいのホテルのスイートルームで身分不相応な第一夜を過ごしました。

翌朝、車で迎えに来て下さったジレスピーさんに、お孫さんやお嫁さんの勧めているガラスのコーニング社を案内して頂きました。工場、事務所に千人もの人が働いているのにシーンと静まりかえった清潔そのものの社内に驚きました。ジレスピーさんの指さす方に目を向けますと広い庭の沢山の旗の中に日の丸が翻っているではありませんか。会社ぐるみの温いお心遣いが感じられ、胸がジーンとしました。

昼はホテルで日本人女性のライオンズ寿子さんの通訳で改めて今度の御厚意を謝し、直接お会い出来た事の幸せを伝えると共に色々のお話を聞く事が出来ました。米軍が島を攻撃した時、空から海からいくら攻めても上陸するとあの平坦な島のどこからか日本兵が出て来て応戦する。その国を守る為の勇敢さにはただ驚くばかりだった。又上陸した時小屋の側に四名の日本人が頭を海に向けて倒れていたがその内の一人がお父様ではなかったかと思っている。又その一人は看護婦だったが、長い戦闘の末であったにも拘らず何故かその白衣がきれいであった事が印象に残っている。雑のうには父の手帳と共に家族の写真や手紙が沢山入っていたが、それは残念ながら持って帰れなかったと辛そうに話され、私もそれ以上は聞くにしのびず納得しました。記念として私の拙い書の軸をお贈りしても喜んで頂きました。

夜は日本人会の歓迎会を開いて下さるとの事で集会所に行きますと、日本人会の方々が、稲荷ずし、五目ずし、唐揚げ、サラダ、ケーキ等お手製の料理を大皿に一品宛持ち寄って下さり、およそ五十名程で原先生の通訳により賑やかなバイキング歓迎会を開いて下さいました。そして一人ひとりが代るがわる見えては「良く来て下さいました私達日本人としてとても誇りに思っています。」と伝えて下さり、私もはるばるここまで来て本当に良かったと思いました。（日本人は約百名いる由）

翌日はライオンズ夫人の案内で御主人の転勤でトレド滞在中の渡辺さん宅に招かれ他の二人の日本人の方と心づくしの白い御飯に味噌汁や納豆で御馳走になり、近くのカソリックの学校の庭に案内して頂きました。教会あり、ひっそりとした静寂そのものの聖地にある池には紅葉の影を落して心も洗われる思いでした。ホテルで息子さんが、父から私へ送って来た絵入りの葉書や、父のスケッチブックを写真に撮って下さり、コーニング社のガラスの器をおみやげに頂き、空港まで御一家と日本人会の方々の見送りを受けてシカゴにむけて飛び立ちました。

ホテル代も私達の支払申出に対しホテルのオーナーが特別の嬉しい事として無料を申出て下さったとジレスピーさんから聞き、トレドの皆さんの御厚意に更に感謝感激を新に致しました。

帰国まで三日程シカゴに滞在しましたが、ホテルの手配や広い空港で迷わぬ様にと知り合いのシカゴ新報社（日本字新聞）の方に出迎えを依頼して下さるなど、目に見えない細かい心くばりをして下さり、日本人以上に日本人の心を持った方、それだからこそあの日誌を五十年もの間遺族を八方手をつくして探して下さったのだと改めて感謝すると共に、思い切って御本人に会いに行って本当に良かったとしみじみ思っております。

尚、私の父と同時に山陰中央新報社を通して、弟さんの遺品が戻って来た岡谷市の林　廣さん（本会会員）とも何度かお電話をしましたが、訪米の際ジレスピーさんとその友人の遺族の方にと（林さんの遺品はジレスピーさんの友人が拾われたが、その方は故人となられた）時計をお預かりして持参、お渡しして喜んで頂きました。今年の四月終り、奥様からのお電話で七年に一度の諏訪の御柱祭に御招待頂き、五月初旬、娘さん御夫婦の御案内で勇壮な御柱祭を目のあたりに見る事が出来、

重ねての御縁に又々感謝するばかりでした。

お伺いした当時、御病気で林さんは入院されておりお目にかかれず残念でしたが、現在は退院、自宅療養中と伺いホッと致しております。

名を彫りて
―古き歌ノートの思い出―

会友　平林　和夫

(一)

名を彫りて征きし友あり学園の
　楠は今　亭々と立つ

生きてあらば再び会わむ学園の
　楠に彫りし　君と我の名

陸海軍と分かれしままに音絶えし
　友の畢りを知るや　楠

この短歌は、古い古い私の歌ノートに、とりとめもなく書かれた中の一つである。もう五十何年も前の、まだ私が戦地から復員して間もない頃、京都の母校を初めて訪うたときの歌であった。

この歌の中の、私の親しい一人の友人について、今、若き日の事どもを思い出してみたい。（歌は便宜上新かな遣いに表わした。）

(二)

昭和十六年十二月八日、即ち太平洋戦争開戦（当時国内では、大東亜戦争と呼称）の日、私らは、大学法経学部の二年生であった。（旧制大学は在学は三ヶ年で、一般に何回生と呼んでいた。私らの大学は、学年制であった）。皆興奮して、終日駆け回って、意気軒昂したことを覚えている。

私らの上級三年生は、早くも在学短縮で十二月に繰上げ卒業し、勇躍して各々が、戦線に出て行った。

三年になると私らは、それが更に早くなって、半年短縮になり、九月に卒業、当然のこととして、十月には兵役に服する予定とはなった。

その頃私は、小員数ながら、心許されるよき親友に恵まれていた。中でもS・Aという友人は、人物誠に誠実、沈着剛健な、よい人柄であった。私とは専門学部から大学部まで、六ヶ年間ずっと一緒であったが、私も同様に、学資を生み出しながら、真摯に学業に励んでいた。

彼と私は、卒業の直前、学園の庭木楠の、人の目につかぬ場所に、小さく、S・Aと、K・Hの、頭文字を彫りつけた。

「生きてあらば」いつかここで、再会せんことを、誓い且つ祈ったのである。

それは、いぢらしい程の、真面目な、小さな、私やかな行為であった。

私は在学中に出願受験した海軍の、主計科二年現役（短現とも呼んだ）に、幸いに合格決定し、大学卒業が九月二十四日、直ちにその月三十日、私は海軍々籍に入り、海軍主計見習尉官として、海軍経理学校補修学生に入校する見込みであった。

そして彼S・Aは、当然として陸軍に入営、やがて甲幹（甲種幹部候補生）になり、新進気鋭の若手将校として、活動する筈であったのだ。

(三)

私らは予定のように、九月に大学を卒業し、直ちに軍隊に分かれて行った。こうして、彼と私は、「陸海軍と分かれたままに」二度と会うことはなかった。文字通り、卒業式の日が、決別の日であったのである。そして戦後も又一切の「音絶え」て、全く別の世界になったまま、十二月八日は、今年間もなく、五十七回目を迎えようとしている。

ただ一度だけ、私が南方基地にあって、まだ日本軍が勢を持っていた頃、彼から返事のはがきが届いたことがあった。

私が出したはがきの中に、私は「……おかげで元気、さらに○昼夜基地を前進。それにしても、戦争は勇ましく美しい。しかも一挙にだ……」と書いたことを覚えている。

彼は返事の中に、私のこの言葉を再掲して、「堂々たる戦いを祝す。自分は未だ猛訓練中。健闘を祈る……」と結んでいた。軍事郵便の検閲印づきであるから、私らは当然のこととして、漢文調の簡潔壮重を好むように、なって来ていたのである。

後にも先にも、彼の心にふれたのは、この一枚の軍事郵便はがきだけであった。

では私は、どんなあゆみをしていたのであろうか。私は経理学校補修学生を卒業して、南方の海軍航空隊に服務した。詳しくふれる余裕はないが、はるばるとラバウルに着任してから、南方各地を轉戦移動し、終りは太平洋はマーシャルの孤島基地にあって、十九年一月三十日、敵の大挙来襲以来、丸二ヶ年に亘って、補充補給の全くない、苦悩の篭城戦・糧食戦を余儀なくされ、終戦によって、幸うじて帰国することが、出来たのであった。この二ヶ年間は、誠に不本意な戦さではあった――。

(四)

私は帰国後、京都市の母校大学を訪うた。京都市は幸い戦災を免れていた。学園もそのままであった。

私らが名を彫った楠は、四年の間に、大きく伸びて茂っていた。彫った名前の場所は、さがしても見当らなかった。事務所の方に尋ねて見たが、友の消息も又、全く得られなかった。知らぬ人ばかりの、何かこう、別の大学に来た

かのような感じであった。

彼が復員しておれば、楠に名を彫った彼が、黙っている筈がない。古い名簿を見て、手紙を出したが、戦後の混乱の為か、届いた様子もなかった。

私は今年になって、初めて彼の古い、大学の名簿の住所の役場（今は合併して市役所）に行って、手をつくして、その後の彼のことを尋ねて来た。市役所の受付で、こう云うことをお伺いしたいので、と訊いて、関係の課の方に廻った。その課では、時節柄用心をしてか、なかなか話してくれなかったが、とにかく確かめられたことは、彼がやはり戦死をしていたことと、遺族の方の、住所氏名を教えてくれたこと、の二つだけであった。

年内にも、私はこの遺族のお方をお訪ねし、学生の頃のお話を聞いて頂いたり、戦場での様子などを是非お伺い

（16頁へつづく）

第三玉丸の半舷員

上の写真は、昭和十八年二月頃第三玉丸がマーシャル群島のルオット島に入湯のため半舷上陸したときのものです。

第三玉丸は、第五玉丸、第七昭和丸、第八昭和丸とともに第十六掃海隊としてマーシャル、ギルバート方面行動中、十九年一月三十日米軍の大攻撃をうけ、クエゼリンで玉砕しました。

この写真入用の方にはコピーをさしあげますので、本部にお申込下さい。

写真を提供下さったのは元第三玉丸乗組員の安室慶二様（横浜在住）です。

丘の小春

—自句自解—

会友　蒼生　横山文吉

披露山の百合は浪子のうなじとも

逗子海岸、浪子不動の朱塗り御堂から見下ろす海面には蘆花の実兄蘇峰先生の筆による「不如帰」の石碑が台座の巌もろとも波に曝らされ、披露山の中腹の崖ぶちには一本の百合の花の白いうなじが淋しくかすかに揺れていた。

如月の海したたかに古稀に入る

いつの間にか来てしまったという空虚な気持だけが残るのだが、ゆっくり振返ってみるとそれはそれは私にとって永い歳月であったことを思ひ知らされる。

暮跳んでよろめきやすき灯がともる

小学校の同窓会で越後新発田へ帰郷したとき、二人の名妓が友情参加（芸者としてではなく同じ会員として）していてくれた。もう已でに六十才を越えてはいたがその容色は少しも衰えておらず、あでやかさの中に香わしき少女の顔で踊りを披露してくれた。

秋扇や老妓にありし幼な顔

竹林に冬日届かぬ神の声

枯れ急ぐ坂の途中の道祖神

山を背に枯れ田の鷺の歩きだす

湯の山の尾根より低く冬の鳶

妻ねむる丘の小春や三回忌

この日、平成九年十一月十六日は案に違わず冬晴れの好天気に恵まれた。これも生前の妻の行いが好かったからだと誰かが言って呉れたので嬉しかった。七十九才で仏様になった妻久美の第三回忌の読経と鐘と木魚の音が本堂のしじまを縫って厳かに且つ、しめやかに響きわたってゆく……。

寒菊を活けて香炊く是空かな

ルオット島の浜木綿（はまゆう）

静岡県　服部くにゑ

昭和四十八年に浮田前会長さんがルオット島から頂いてきた浜木綿（浜万年青、文珠蘭）の球根を頒けて頂き、大事に育てております。

よく咲いてくれた年もありましたが、平成五年の冷夏と長雨で球根がすっかり傷んでしまい、春になっても葉が出ず心配しておりました。今年三月、何時ものように植え替えをいたしました所、三cmと一cm位の球根が二つ元気でおりましたので大切に大切に育てておりました。五月二十日、朝の水やりの時には気がつきませんでしたが、午後になり十五cm位茎が伸びていてびっくりいたしました。

それからは日毎にぐんぐん伸びて六月三日、五年ぶりに一輪、十日には写真のように三輪ピンクの花を咲かせてくれました。娘共々大喜びで植木鉢を仏壇の前に持って行き御霊にお見せしました。

今年は夏の暑さに葉も大きく伸びて参りましたので来年を楽しみにしております。球根は直径五－六cmになると茎を伸ばして南十字星のような形に四輪ピンクの花を咲かせてくれます。

朝晩涼しくなってきましたので、ボツボツ部屋の中へ入れようと考えております。

冬になりますと葉が全部枯れて球根だけで春を待っていますがマーシャルの島がなつかしいでしょうね。

会長様、奥様、役員の皆様の御健康を心よりお祈り申し上げます。かしこ

（平成十年十月十六日）

（関連記事（22号12頁、24号20頁、50号16頁））

寄付者芳名

（敬称略・順不同）

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

北海道　伊藤　フジ　田村賢治郎
青森県　西村　博　池田　こと
宮城県　伊勢　照男
山形県　秋保　十郎
群馬県　珍田　光子
埼玉県　鈴木　裕子　小谷中せい
千葉県　橋本　強
東京都　櫻井　一正　矢野　雄三
神奈川県　岩田とし子　平松　菊枝
新潟県　坂井　繁男　古川　龍尊
富山県　柴田外美子　中林　ちよ
福井県　田川　佳夫
長野県　牛山　光子
愛知県　岡島みね子
三重県　清水　良一　近沢　あき
京都府　坂下　龍蔵
大阪府　久保　末喜
広島県　田村誠一郎
愛媛県　新田　忠雄　松友　都
福岡県　鐘ヶ江敬介
長崎県　香月　正紀
大分県　木ノ下貞子　木村二三夫
宮崎県　森　フサエ
鹿児島県　和田　芳久
沖縄県　石原　キク

以上は平成十年六月一日から同年十一月三十日までに寄付された方々三五名でその合計金額は十七万九千円であります。

名簿訂正

(15) ◎　平成10年9月30日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏名>	<訂正事項>
20	佐藤知子	〒356－0017　埼玉県上福岡市上野台2－3－84－102　☎0492－63－9185　戦歿者佐藤艱三長女　第三文丸　戦歿年月日19.2.6　戦歿地　クェゼリン〈新入会〉
25	江間正二郎	〒965－0007　会津若松市飯盛2－3－8　住居表示変更
30	西勝章夫	〒353－0004　埼玉県志木市本町6－21－20　☎048－472－0416　戦歿者西勝光助　長男　67警　戦歿年月日19.2.9　戦歿地　クェゼリン〈新入会〉
33	青木利一	戦歿年月日18.11.25を19.2.24に訂正
42	森井静子	〒255－0003　神奈川県中郡大磯町大磯741－12　☎0463－61－6271　戦歿者木全　信　長女　海軍軍属（船員）　戦歿年月日19.1.24　戦歿地クェゼリン〈新入会〉
46	小林ヨシ子	〒921－8046 石川県金沢市大桑町平1－1　県住4－8　☎076－244－5732　戦歿者上野一英長女　4施　戦歿年月日19.2.6　戦歿地クェゼリン
68	吉良正義	〒814－0132　福岡市城南区干隈2－44－17－403　大分市より移転
71	栗林徳五郎	〒158－0095　1－9－27を1－9－25に番地訂正

（14頁より）
申したいと思っている。出来れば、お墓参りもさせて頂きたいと願っている。
――今は、あの母校学園は郊外に新キャンパスを移し、跡は面影もなく、別の世界になってしまっている。
あの楠も、もちろん存在しない――。
残っているのは、あの古い古い、歌ノートだけなのかも知れない――。
（十、五、十）
（筆者は元マロエラップ、第二五二海軍航空隊主計長）

（1頁より）
◎直会に参加される方は同封のはがきに記入して一人四、五〇〇円を郵便振替でお振り込み下さい。
◎九段会館に宿泊を希望される方は、同封のはがきの所定欄に記入し、料金一人一万円（一泊二食付）を本部にお振り込み下さい。
申込み後の変更や取り消しは直ちに直接左記に電話し、本会にもその旨をお知らせ下さい。
九段会館　宿泊部
〒102-0074　千代田区九段南一―六―五
電話　03―三二六一―五五二一
◎当日は受付け付近の混雑が予想されますので、年会費、寄付、直会参加費、九段会館宿泊料などは、二月中に到着するようお振り込み下さい。
当日は参加者の確認だけにしたいと思います。

環礁「ミレー抄」（21）

会友　成宮芳三郎
（元66警備隊軍医長）

二年の苦難に耐へて迎へたる
朝の光のさゆれかなしぶ
この日まち逝きつる人を知らぬげに
病院船氷川丸の白きかげ寄る
冬の雨上りて月光白き中
遺骨を迎ふる船の発ちゆく
吹き晴れて百余の離島かすかにも
水平線のかなたに小さし
海越えて帰り来れば妹は
暗き病舎に泣きて語らず
たたかひに命死なずて富士のねの
ふもとに来り年を迎へつ

本部だより

☆「環礁」合併本第七集お申込みの方と第一集から第六集までを追加申込みされた方には十月中にお送りしました。
☆「会員名簿」は会員、会友全員に十月下旬にお送りしましたが、印刷のミスで一部に不鮮明な箇所があり、大変御迷惑をお掛けしましたこと誠に申し訳ありません。謹んでお詫び申し上げます。
☆お便りをお寄せ下さい
この「環礁」を、同じ境遇の仲間たちの心のふれ合いの場としてお気軽に御利用下さい。身の周りのこと、趣味やレクリエーションのこと、この会に対する率直な注文など何なりとお寄せください。採否と多少の手直しはあらかじめ御了承ください。
☆入会のおすすめ
本会は、会費を納めた者を会員として登録し二月と八月に会報「環礁」をお届けしております。
マーシャル諸島とギルバート諸島方面の戦歿者の親族ならば誰でも、又、御一柱に何名でも御入会頂けます。同方面に勤務された戦友の皆様には会友として御参加頂いております。会員、会友とも会費は一ヶ年二千円で入会金は要りません。
☆事務局よりおねがい
一、会への送金は原則として「郵便振替」を利用ください。申出でのない限り領収書は発行しませんので郵便局の受領証を保存してください。

謹賀新年

平成十一年元旦

◎本会役員及び篤志会員

顧問	栗林徳五郎	幹事	高林芳夫
相談役	大給湛子	同	山口良二
会長	佐藤宗丕	監事	佐竹エス
副会長	黒川誠	同	高橋鎮夫
同	逵間樂平	篤志会員	徳原徳子
常任幹事	荒木常子	同	長谷川栄次
同	内海淑子	同	長谷川敏
幹事	石谷典夫	同	松平永芳
同	井上武彦	同	山村要

本部
〒103-0013　東京都中央区日本橋人形町一―八―二（泉商事ビル）
マーシャル方面遺族会
電話〇三―三六六一―八七六〇
FAX〇三―三六六一―八七六〇